

Lib. Letter

[ライブ・レター]



埼玉県のマスコットコハトン

平成20年12月1日 通巻 第14号

編集・発行 埼玉県立熊谷図書館

<https://www.lib.pref.saitama.jp/> Tel 048-523-6291

外国人が見たニッポン ～ペリーの『日本遠征記』～

長い間、鎖国政策をとり、足を踏み入れることができなかった未開の地ニッポン。長い航海の果てにたどり着いた先には、不思議な人・モノ・風習がたくさんありました。

今回は、ペリーの『日本遠征記』を中心に、幕末・明治期に日本を訪れ、そこで過ごした外国人たちから見た幕末・明治の日本の姿、日本人の不思議をご紹介します。

○黒船の長い旅路

世界は産業革命を迎え、大量生産の時代となっていました。新たな市場の獲得競争において、イギリス・フランスなどのヨーロッパ諸国に後れを取ったアメリカ合衆国は、太平洋で操業する捕鯨船や運行する商船が、燃料や食料を確保するための拠点を必要としていました。そこで、鎖国政策をとる日本を開国させ、太平洋航路を確立させるため、1852年11月24日、フィルモア大統領の命を受けた

北亞墨加利人



ペリー像

マシュー・ペリー提督は、アメリカ合衆国ヴァージニア州のノーフォークを出航しました。艦隊は、

南アフリカのケープタウン～セイロン島～シンガポール～香港～上海を経由して1853年6月3日に、浦賀沖に投錨しました。このとき、江戸湾で黒船艦隊を迎えたのは、数発の大砲の音と、艦隊を包囲するために集まった、たくさんの番船でした。日本の船について、ペリーは、「番船の船形の美しさには、誰もが感嘆の念に打たれた。」「アメリカのヨットの形によく似ていた。番船はすいすいと水の中、というよりは水の上を進んでいた。」と表現しています。

ペリーの『日本遠征記』とは？

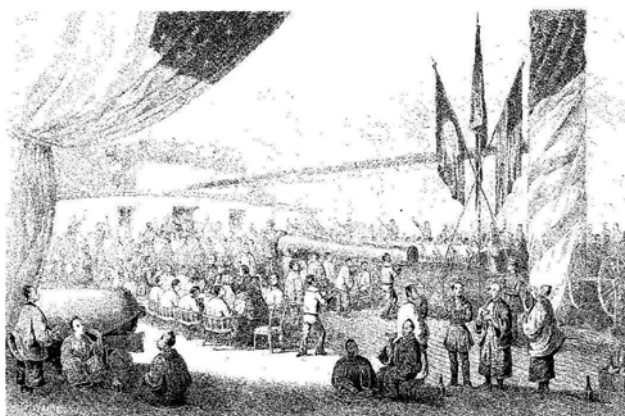
原書は『Narrative of The Expedition of an American Squadron to the China Seas and Japan』といます。1855年に帰国したペリーは、ニューヨークのカルベリー協会の牧師で歴史家のフランシス・L・ホークスに日本遠征で得た全ての資料を渡し、編集を依頼しました。内容は、ペリー自身の日記と公式書簡が大部分を占めていますが、その他に、参謀長アダムス中佐、旗艦副官コンティ、通訳のウィリアムズ、画家のハイネなど随行員の記録も含まれており、原書の前書きの脚注に一覧されています。

『日本遠征記』は全3巻からなり、第1巻は航海記、第2巻はペリー艦隊が調査した琉球や小笠原諸島、日本の植物・魚類・鉱物などの報告、第3巻は黄道帯の記録や水路図などで構成されています。

(参考：『ペリー来航と横浜』 横浜開港記念館 2004)

○日本人を迎えた晩餐

日本開国への交渉が順調に進みだした頃、ペリーは日本人を招待し、アメリカ式の宴を催しました。ペリーは、作法の厳格な日本人は、身分の高い人間とその部下が同じ食卓に着くことができないことを知っていたので、日本人への敬意を表し、宴席を2つ設けるように命じました。招待を受け、旗艦へ乗り込んだ日本人たちは、大砲や機械をつぶさに見学し、曲射砲を乗せたボートが発砲する様を見て楽しみました。この様子は、「日本人はあまり好戦的

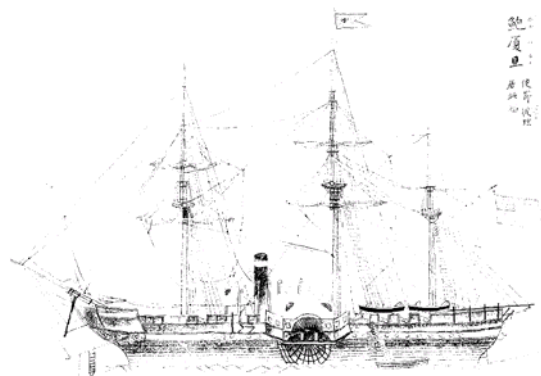


旗艦ボーハタン号甲板上の午餐会

『図説 黒船の時代』河出書房新社 1995より

な国民ではないのに、明らかに軍事演習を見るのは大好きだった。」と記されています。この後、5人の高級委員はペリーの船室に、部下たちは甲板に設けられた宴席へ案内されました。宴席では、シャンペン、マデイラ酒、パンチなどが振舞われ、テーブルに満載された料理を、コースの順序などお構いなしで、魚、肉、スープ、シロップ、漬物、ジャムをごたませにして食べる邪道ぶりと、いちばん大食いのアメリカ人も驚く大食漢ぶりを見せたようです。

さらに、アメリカ人たちを驚かせたのは、日本人の紙の使い方でした。もとより、アメリカ人たちは、綿布のような柔らかく強靱な紙が、筆記の道具にも、ハンカチーフの代わりにもなると認識していましたが、日本人たちが、懐から取り出した紙で一斉に「どんな食べ物でもかまわずに、手当たりしだいに残り物をかき集め、混合食品の包みをこしらえた



6. ボーハタン号（黒船来航図説）

『ペリー来航と横浜』横浜開港記念館 2004より

様子を見て、目を丸くしました。それは「レービック[※]の化学でも、提督付きのパリ仕込みの料理人の熟練した味覚でも、十分な分析はできなかつただろう」と評しています。ただし、これは日本人の流儀であり、もてなしの大事な部分であるとして認められており、ペリーやその部下たちが日本側にもてなされたときも、「残り物を詰めた紙袋を手押し付けられ、持ち帰らざるを得なかつた」ようです。

(※ユストゥス・リービヒ [独 1803~73年 化学者])

『岩波ケンブリッジ世界人名辞典』岩波書店 1997より)

○理解しがたい「お歯黒」

日本人の風俗や習慣を知りたいと望んでいたペリーは、下田の町を視察した際に、多くの住民を観察しています。女性の「お歯黒（鉄漿・かね）」については、特に印象に残ったようで、「上品に微笑んで「ルビー色」の唇が開くと、ひどく腐食した歯ぐきに黒い歯が並んでいるのが見えた。歯を染めるのはもっぱら日本の既婚女性の特権であり、鉄の粉と酒などを含んだ、・・・」と記しています。異様で醜いものとする一方で、「お歯黒」が何から作られ、何のために行われるのかの知識は得ていたようです。また、「この習慣

は夫婦の幸せには何の役にも立たないと思うし、当然ながら恋人時代の恍惚のうちに接吻をし尽くしてしまわなければならないだろう。」と、一人のアメリカ人として皮肉っているのも、『日本遠征記』を読み進めるうえで、とても興味深い点でもあります。

「お歯黒・鉄漿(かね)」とは？

お歯黒を調べると、「鉄片を加熱して、酢または酒、近世はさらに出し茶に飴を交ぜた中に漬け、褐色になって芳香するまで密封して作るのを鉄漿という。」とあります。これに五倍子(ふしこ)を交ぜて、歯に塗布し、黒く染めました。平安時代から慣習として文献に現れ、『枕草子』『源氏物語』などにその記述が見られます。

もともとは、平安時代の貴族の間で行われていましたが、江戸時代になると、庶民の女性の間でも行われるようになりました。黒は何色にも染まらないことから、「貞節」を意味したとも考えられます。1973年(明治6年)に皇太后が率先して「お歯黒」を止めたことから、民間の風習も次第に廃止されました。

(参考：『国史大辞典』吉川弘文館 1983)

ペリーは、「お歯黒」の習慣は忌まわしきものとしながら、日本人女性の活発で自主的な立ち居振る舞いには、とても好感を持ったようです。その要因を、女性が伴侶として認められ、他の東洋の国々とは違い比較的高い敬意を払われているとし、「一夫多妻制度がないという事実は、日本人があらゆる東洋諸国民のなかで最も道徳的で洗練された国民であるという、優れた特性を示す顕著な特徴である。」と評価しています。

この他にも『日本遠征記』の中には、ペリー一行が、日本の力士たちのあまりの巨大さや力強さ、見かけからは想像もできない軽い身のこなしを見て驚いた様子や、下田の公衆浴場で、控えめで同義的なはずの日本人が、頓着せずに男女混浴をしている姿を見て眉をひそめた様子など、さまざまなエピソードが描かれています。当時の日本にとっては日常の光景であったものや、現代まで通じる伝統や風習などが、開国によって初めて日本と日本人に触れた外国人たちの目を通して見てみると、また違った新鮮さと驚きをもって、私たちの目にも映るかもしれません。

*本文の引用は全て『ペリー艦隊日本遠征記 vol. 1 (ペリー [著] オフィス宮崎 訳・構成 栄光教育文化研究所 1997) によります。

【ペリーと黒船に関する資料】

『猪口孝が読み解く『ペリー提督日本遠征記』』三方洋子訳 NTT出版 1999

(公開：291.09/イ)

『ペリー艦隊日本遠征記vol. 1・2・3・別巻』ペリー [著]

オフィス宮崎訳・構成 栄光教育文化研究所 1997 (公開：D291.09/ヘ)

『ペリー来航と横浜』横浜開港資料館／編 横浜開港資料館

2004 (公開：210.5953/ヘ)

『図説黒船の時代』黒船館／編 河出書房新社 1995 (公開：210.58/ズ)

『ペリー日本遠征記図譜』豆州下田郷土資料編 京都書院 1998

(公開：B291.09/ヘ)

『ペリー提督日本遠征記』合衆国海軍省編 大羽綾子訳 法政大学出版局

1953 (書庫：210.58/ア)



埼玉県のマスコットコハトン

++ 幕末・明治期の外国人の滞在記・回想録 ++

ペリーの『日本滞在記』以外にも、日本開国を経て、多くの外国人が幕末・明治期に日本を訪れ、数多くの滞在記や回想録が残っています。それら滞在記や回想録の一部をご紹介します。

- 『大君の都 幕末日本滞在記 上・中・下』 オールコック著 山口光朔訳 岩波書店
1962 (書庫：B210.58/オ)
- 『英国外交官の見た幕末維新』 A. B. ミットフォード著 長岡祥三訳 新人物往来社
1985 (書庫：210.58/ミ)
- 『ヤング・ジャパン 横浜と江戸 1・2・3』 J. R. ブラック著 ねず・まさし訳
平凡社 1982 (書庫：210.59/ブ)
- 『明治日本見聞録 英国家庭教師婦人の回想』 エセル・ハワード〔著〕 島津久大訳
講談社 1999 (公開：B210.6/メイ)
- 『ある英国外交官の明治維新 ミットフォードの回想』 ヒュー・コータツツイ〔著〕
中須賀哲朗訳 中央公論社 1986 (書庫：210.61/ア)
- 『一外交官の見た明治維新 上・下』 アーネスト・サトウ〔著〕 坂田精一訳 岩波書店
1960 (書庫：B210.61/サ)
- 『日本奥地紀行』 イサベラ・バード〔著〕 高梨健吉訳 平凡社 1973 (公開：291.01/バ)
- 『クニッピングの明治日本回想記』 エルヴィン・クニッピング〔著〕 小関恒雄訳編
玄同社 1991 (書庫：289.3/Kn4/)
- 『日本滞在記 上・中・下』 ハリス〔著〕 坂田精一訳 岩波書店 1953 (書庫：B291/ニ)
- 『日本滞在記』 E. W. クラーク著 飯田宏訳 講談社 1967 (書庫：291.09/ク)
- 『セーリス日本渡航記 新異国叢書』 セーリス〔著〕 雄松堂書店 1980 (書庫：291.09/シ)
- 『幕末日本探訪記 江戸と北京』 ロバート・フォーチュン〔著〕 三宅馨訳 講談社
1997 (公開：B291.09/ハ)
- 『日本見聞記 フランス人の見た明治初年の日本 1・2』 ブスケ著 野田良之訳
みすず書房 1977 (書庫：291.09/ブ)
- 『マクドナルド「日本回想記」インディアンの見た幕末の日本』 マクドナルド原著
ウィリアム・ルイス編 刀水書房 1979 (書庫：291.09/マ)
- 『ロングフェロー日本滞在記』 チャールズ・アップルトン・ロングフェロー著
山田久美子訳 平凡社 2004 (公開：291.09/ロン)
- 『モンブランの日本見聞記 フランス人の幕末明治観』 C. モンブラン他著 森本英夫訳
新人物往来社 1987 (書庫：291.09/Mo37)
- 『オーストリア外交官の明治維新』 アレクサンダー・F. V. ヒューブナー著
市川慎一訳 新人物往来社 1988 (書庫：291.09/H98)

※すべて、県立熊谷図書館で所蔵しています。